

# 学校における危機管理についての考察

宮崎 弘尚

## Crisis Management: Mundane Awareness for School Security.

Hiroataka MIYAZAKI

### I はじめに

平成7年1月17日阪神大震災発生から20年の年月が流れた。早朝の大都市圏での大地震は私たちに危機管理について大きな課題を示唆し、辛い教訓として忘れてはならない出来事であった。近年、東日本大震災、広島豪雨等大型台風による災害、御嶽山火山爆発等の自然災害に留まらず、多岐にわたる事件・事故が発生している。私たちは、この事件・事故の教訓を忘れることなく、日頃からの備えを怠ることなく生活していかなければならない。社会全般に限らず、学校においても、大震災発生時での対応の在り方、いじめによると思われる児童生徒の自殺、児童虐待など多岐にわたる事件、教職員の体罰、不祥事等が発生しており、危機管理の重要性が叫ばれるようになった。

一方、現在、学校では、このような状況の中で、種々の問題状況（危機）に対応する的確な危機管理の在り方が強く求められている。

そこで、学校で起こり得る危機に対し、適切に対応するための基本的な考え方や予防の方策を探り、学校における危機管理の在り方について大規模地震・津波の具体事例を通して考察することとした。

本研究を進めるにあたり、文部科学省の資料や先人の危機管理に関する考え方を参考に、学校の危機管理について考察し、学校における危機管理の在り方などについて明らかにした。

### II 学校における危機管理

学校は、社会の縮図とも言われる。前述のように、学校においても多くの社会問題・社会事象を背景に危機的状況が発生することは、言うに及ばない。そこで、学校における危機管理について既存の資料を基に整理し、考察を加えることにする。

#### 1 危機管理の定義

山形県教育委員会「学校における危機管理の手引き」によれば、危機管理とは「一般的に、危機がなるべく起こらないように対処する活動をリスク・マネジメントと呼び、危機的な状況が発生した後の活動を危機管理（クライシス・マネジメント）と呼ぶ。しかし、リスク・マネジメントには、危機時の体制やマニュアルの整備等の危機に関する対応事項も含まれている場合もあり、また、危機管理も危機を発生させない活動も含めて危機管理と呼ぶ場合も未然に防止するための事前対策、危機発生時の対応や再発防止に向けた対策を含めた幅広い局面に対応していく取組を危機管理とする。」と規定している。

また、文部科学省「学校における防犯教室等実践事例集」（2003年6月）には、「危機管理とは、人々の生命や心身等に危害をもたらす様々な危険が防止され、万が一、事件・事故が発

生した場合には、被害を最小限にするために適切かつ迅速に対処すること」と規定されている。

## 2 危機管理の必要性

中央教育審議会答申（2008年1月17日）によれば、「学校は、心身の成長発達にある子どもが集い、人と人との触れ合いにより、人格の形成をしていく場であり、子どもが生き生きと学び、運動等の活動を行うためには、学校という場において、子どもの健康や安全の確保が保障されることが不可欠の前提となる。」と示されている。

このことから、学校は、幼児、児童及び生徒等が安心して学ぶことができる安全な場所でなければならない。

しかし、事件・事故や災害は、いつ、どこで、誰に起こるかを予想することが困難である。危機について予知し予測し対策を講じることによって、危機的状況の発生を防ぎ、発生時の被害を最小限に留めるように努力するなど日頃の備えとして大切である。また、危機的状況に対する適切かつ確実な危機管理体制を確立しておくことも忘れてはならない。そのためには、学校における危機管理の目的を明確にしておく必要があると考える。

## 3 危機管理の目的

学校における危機管理の目的については、菱村幸彦氏（「危機管理の法律常識」教育開発研究所）によれば、次の3点を考えている。本論では、これを基調に考察していくことにする。

- ① 子どもと教職員の生命を守ること
- ② 子どもと教職員の信頼関係を維持し、日常の組織・運営を守ること
- ③ 学校に対する保護者や地域社会からの信用や信頼を守ること

## 4 学校における危機管理の内容

学校内における危機管理は、時系列における視点と内容別における視点の2つの視点でまとめることができる。

### (1) 時系列における危機管理の視点

- ① 始業前      ② 授業中      ③ 業間      ④ 昼食（給食）時間      ⑤ 昼休み      ⑥ 放課後

### (2) 内容別における危機管理の視点

#### ① 児童生徒にかかわる危機管理

- ◇いじめ・不登校    ◇自殺予告    ◇家出    ◇授業中の事故    ◇生徒間暴力
- ◇遠足・修学旅行中の事故    ◇部活動中の事故    ◇学級崩壊    ◇登下校の事故
- ◇盗難    ◇器物破損    ◇性非行    ◇薬物乱用    ◇無免許運転    など

#### ② 学校保健にかかわる危機管理

- ◇新型インフルエンザ    ◇伝染病の発症    ◇学校給食による食中毒・アレルギー反応
- ◇飲料水の汚染    ◇鳥インフルエンザ    ◇熱中症    など

#### ③ 学校管理における危機管理

- ◇地震津波災害    ◇学校施設に起因する事故
- ◇不審者による器物破壊、盗難    ◇薬品の紛失・盗難    など

#### ④ 教職員における危機管理

- ◇パワーハラスメント    ◇セクシュアルハラスメント    ◇出張中の交通事故
- ◇成績書類等の紛失    ◇体罰事件    ◇教師のメンタルヘルス    ◇公金横領    など

## 5 「学校における危機管理」についての実践事例を通じた考察

本年は、阪神・淡路大震災が発生して 20 年目に当たり、また東日本大震災が起こって 5 年目を迎えた。多様な危機状況下での対応の在り方が考えられるが、ここでは、大地震・津波への備えについて特化し、「本学での研究授業」（筆者 2011 年 1 月）での授業の展開等を参考に考察することにする。

（研究授業の概要と考察） 授業科目「教職実践演習」 初等教育科 2 年

(1) 題材名 学校における危機管理

(2) 目 標 学校における危機管理の在り方を理解し、今日的な課題について知る。

(3) 授業のねらいと方法について

東日本大震災の教訓をもとに、学校における危機管理を地震津波対策に焦点を当て、在校時に地震津波が発生した場合の学校としての対応の在り方について話し合い、整理させ、発表させることで、危機管理の大切さを理解させる。

(4) 「学校における危機管理」における指導過程に沿った考察

① 課題への意識の喚起：学習課題提示までのプロセスを大切にする。

学習課題をつかませる段階である。スライドをもとに日常の出来事への意識をもつことの大切さに気付く。スライドをもとに、過去の大震災の事例を通し、課題への意識の喚起を行った。「この日は何があった日でしょう」という発問から始まった。

### 事例 1 阪神・淡路大震災

1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災の情報を提示し概要説明した。概要は、以下のとおりである。

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分 52 秒淡路島北部沖の明石海峡を震源としてマグニチュード 7.3 の兵庫県南部地震が発生した。死者 6,434 名を出し、その 80% が家屋倒壊による圧死であった。発生時刻が冬季の早朝であったため、公共交通機関道路の利用率が少なく、外出者も少なかったことで市街地・自宅外での被害を抑えた。気温が 10℃前後であったため倒壊した建屋に閉じ込められた生存者の熱中症・凍傷等の要因が少なく人的被害を抑えた。多くの市民が自宅での被災であったので安否確認が容易であった。火の使用もなかった。

(図 1～図 3 参照)

### 事例 2 関東大震災

1923 年 9 月 1 日に発生した関東大震災の情報を提示し概要説明した。概要は、以下のとおりである。

1923 年 9 月 1 日 11 時 58 分 32 秒神奈川県相模湾北西沖 80 km を震源として発生したマグニチュード 7.9 の大正関東地震による地震災害であった。

神奈川県・東京府を中心に千葉県・茨城県から静岡県東部までの内陸と沿岸に広い範囲に甚大な被害をもたらした日本災害史上最大級の被害を与えた。190 万人が被災、10 万人余が死亡或いは行方不明になったとされる。東京の火災被害が中心に報じられているが、被害の中心は震源断層のある神奈川県内で振動による建物の倒壊のほか、液状化による地盤沈下、崖崩れ、沿岸部では津波による被害が発生した。(図 4～図 5 参照)

② 課題提示：本時の学習課題の明確化を図る。

「在校時に予期せぬ地震津波が発生した時、学校としてどのような対応をしたらよいか」を課題として提示した。また、新聞記事を提示し、新聞記事から情報への意識を高める工

夫をした。(図6参照)学習プロセスの順に沿って最適な資料を精選し、導入時に「学習者の注意を喚起する。」「学習者に目標を知らせる。」ことは大切である。また、「講義の初めに講義全体の流れ等を簡単に説明する。」ことで授業の見通しをもつことも大切である。

学生のコメントからも、学習の見通し、目標の明確化が大切であるとの指摘が見られた。

具体的には次の通りである。「授業の初めに、授業内容をどの程度進めるのか話してくれる。」「ポイントや大切な所が予め予想できたのでわかりやすかった。」等

### ③ 課題把握：学習課題を具体化する。→学習課題の具体化のため「場面設定」

ここでは、「東日本大震災」の事例を取り上げた。内容の焦点化を図るため、次のような発問をした。「3月11日は何が起こった日ですか。」殆どの学生が「東日本大震災である」とすぐに反応した。レディネスを強化する意味で、東日本大震災に関する情報を提示した。宮崎県は、宮城県亘理郡山元町への支援を担当していたことから山元町立中浜小学校の情報を提示し、学習課題の重要性を認識させた。大震災発生前の校舎と津浪通過後の校舎の写真を提示し概要を説明し、大震災の被害の甚大さを示した。3月11日午後2時47分東日本一帯に巨大地震が発生し、地震のみならず津波により多くの人命をも奪う大きな被害をもたらしたことを伝えた。(図7～図11参照)

内容を具体的に説明するため、最近の報道からできるだけ具体例と抽象概念を結びつけことのできる例示等を入れることで、課題解決の糸口を見出し、発想を広げ、解決方法の考察にもつながっていくものと考えた。

学生からも「写真や実例など加えて学べた所がよかった。」「先生の経験談が聞けてより具体的で分かりやすかった。」とのコメントを得た。

### ④ 課題検討：学生主体の活動の保障→個人ワーク、グループワークの設定

個人で考えた対応を発表し、グループで話し合いをさせた。学生主体の活動の開始。これまで収集した情報を整理し、まとめる作業である。そこで、「自分の考えを整理する個人ワーク」や「話し合いで多くのアイデアを出し合い、まとめていくグループワーク」の場面を設定した。学生から「防災に対する学校の危機管理、友人の意見も聞けて沢山学ぶことがあった。」「なかなか自分では具体例、具体案が出せずにモヤモヤしていたので、他の人と課題を共有することで考えを整理することができた。」とのコメントを得た。

### ⑤ まとめ：まとめの段階を大事にする。→学習課題の結論を明確にする。

学習課題についてのまとめをした。問題解決的な学習は、提示した課題の結論を示すことで完結する。ただ、この研究授業では、防災・減災へのよりよい考え方を互いに認識することで教育者として防災・減災への対応の在り方対応の在り方を知ることにとどめた。

学生からは、「小学校がどのような立地条件にあり、海や川までの距離はどのくらいか徹底して調べることが大事だと思いました。」「正解のない状況で少しでも被害を減らすためにどうすればよいかをさまざまな視点で考えられた。逃げるか、逃げないかという究極の選択肢を状況により判断しなければならない教師という職業の大変さを改めて感じた。」等授業のねらいに迫ったコメントが見られた。学習課題解決の糸口が見えたように考える。

### ⑥ 発展（まとめの検証）：宮崎市のA小学校の実践例を知る。

学生が主体的に課題解決することで、災害対応について理解促進を図ることができた。南海トラフ巨大地震津波・日向灘沖地震津波（いずれもM9.1）が発生した場合、宮崎県も例外でなく大きな影響を受けることが予想される。そこで、学生がまとめた内容を検証するために、当時、筆者が勤務していた宮崎市のA小学校の実践例を取り上げた。2011年3月11日、



東日本大震災のテレビ報道を目の当たりにし、児童を災害から守るため、まず学校でできることを足元から始めたこと、東日本大震災を対岸の火事としてとらえず自分自身が抱える課題としてとらえ、早急に、地震津波に対する防災対策を構築する必要があったこと等を踏まえたものである。これまで取り組んだ主な内容を紹介することにする。

#### ア 防災計画案の作成

市教育委員会主催の「学校における津波被害防止に対する検討会」を受け、「地震津波対策チーム」を編成し、日向灘沖で地震が発生したという想定 of 防災計画の素案を作成した。(表 1 参照)

防災計画は、東日本大震災発生直後に作成したものであり十分なものではなかったが、避難対応への見通しをもつには有効であると考ええる。作成上、留意したのは、一見して対応の全容が把握できる防災計画を作成することであった。

#### イ 避難訓練の実施

3 月 11 日の東日本大震災の教訓を無にしないため、9 月に予定していた避難訓練を 5 月に変更し実施することにした。具体的には、以下に示すが、従来の計画との変更点は、これまで地震が治まって後、運動場に避難していたが、津波に備え校舎 3 階に避難することにしたことである。ねらいは、地震・津波発生時の避難訓練は勿論だが、津波の発生を予測して 700 名もの児童が一斉に校舎 3 階へ移動する場合の所要時間と実施上の留意点を把握することにあった。

##### 【避難訓練（地震津波）実施計画案の概要】

##### ○目 的

- ・非常時に際して、迅速で安全な避難誘導ができるようにする。
- ・地震津波発生に際して、安全な避難要領を知り、非常時に対処できる態度と知識を身につける。

○日 時 5 月 18 日 (水) 朝の時間から 1 校時(8:15~9:30)

○想 定 日向灘沖に東日本大震災規模の大地震発生、その後津波発生。

- ・指導の流れ(概要は、表 2、図 12~図 16 参照)
- ・避難訓練後の考察

##### ○成 果

- ・校舎 3 階へ避難完了まで所要時間の目途が得られた。
- ・各棟に責任者を置いたことで、児童避難完了報告が円滑に行われた。
- ・職員の役割分担が確認でき、組織的な対応について理解できた。
- ・本校職員が撮影した現地映像を視聴させたことで、より臨場感をもって訓練できた。

##### ○課 題

- ・中・北校舎 3 階に避難する前の地震の揺れをしのぐための安全確保について再確認する必要がある。
- ・避難経路の確保をするために、校舎内の施設、設備の安全点検を行う必要がある。
- ・第 1 情報が迅速、正確に把握できる方法を工夫しなければならない。
- ・発生時間別の避難対応も考えなければならない。(避難計画ケース A の詳細検討)

- ・地域の避難所としての対応のあり方を考えなければならない。

#### ウ 安全対策マニュアルチェック表による防災対策点検の実施

避難訓練の反省に基づき、確実に防災対策対応を行うために、安全対策マニュアルチェック表を作成した。学校としての取り組みを事前(災害に備える)、事中(児童の誘導、保護者への連絡、児童の引き渡し、地域住民への対応)、事後(災害後の対応)に整理し、現状を把握するための視点とした。(表3参照)

#### エ 校内安全点検の実施

夏季休業中に、「大規模地震に備えた安全点検」を実施した。これは安全対策マニュアルに従って、地震発生時に、二次被害を防ぐため、落下、転倒する可能性のある設備、備品等を点検するものである。避難路を確保するために、廊下、階段に置いてある備品の点検を行った。(表4参照)安全点検をした結果、具体的に現状を把握することができた。後日、地震発生時の対応を検討し、学級、学年等で対応可能なもの、職員で対応できるもの、行政に依頼した方が望ましいものに区別し、計画を立てることができた。

#### オ 地域との連携

##### ○ 保育園

近隣のB保育園から地震・津波に備えた避難訓練実施の申し出があり、避難場所として南校舎を提供した。乳児、幼児対象の訓練のため、職員、保護者の協力のもと実施していたが、さらに安全で迅速に避難できる手立てはないかと考えたところである。関係機関との連携を期待したい。

##### ○ 地区自治会防災訓練

地区の防災訓練が行われた。防災訓練に南校舎に避難するという活動を挿入してもらった。学校の標高、地区の地勢、校舎の高さ等を説明し、2階、屋上に避難することにした。

屋上からの景観を展望し、海岸から近くの地域であること、河口から近いこと、近くに高い建物が少ないことの確認ができた。(図17～図21参照)

##### ○ 災害図上訓練

10月に、「大地震と津波を想定した災害図上訓練」を行った。地区内の危険個所、緊急の避難場所、避難の仕方、災害への心構え等を学んだ。12月にも、学校の周辺地域の地域住民が参加し図上による避難訓練が行われた。(図22～図27)

学校は、風水害発生時の避難所にもなっている。また、地区内には多人数を収容できる施設が見当たらず、(災害発生時間帯との関係もあるが)地域住民の受け入れをしなければならないと考える。地区内は住宅地で人口も多く、学校の収容人数も限られることから行政と連携を図り、秩序ある受け入れをしなければならない。保育園等の避難についても、関係者と連携し、できる限り対応するようにすることである。各自治体も自主的に防災体制を整え、行政と連携して住民自ら避難場所の確保のため、リサーチしていくことも必要である。

#### カ 被災地の方々への支援を通して心情を培う(心作り・情操教育)

宮崎県が口蹄疫で苦境に立たされ、復旧・復興に懸命になっていた時、全国から温かい支援をいただいた。災害復旧・復興の労苦は、被災した者でしか理解できない辛いものである。同様に、東日本大震災も例外ではない。口蹄疫で宮崎県がいただいた温かい励ましと支援を被災地の方々に返礼し、被災された方々への励ましと復興の支援の心をお届けした。児童には、被災地の方々への支援を通して思いやりの心を醸成する情操教育充実のための良い機会となると考え、以下のことに取り組んだ。

## ○ 山元町への支援

5年生の担任から体験学習で収穫した餅米 30 kgを児童のメッセージを添えて送りたいという申し出があり、宮城県亘理郡山元町にお届けした。後日、山元町立山元小学校の児童からお礼状が寄せられ、互いの思いやりと感謝の輪が広がった。また、福島県に親戚のいる職員を現地へ出張させ、現地の様子を避難訓練の際に映像とともに報告をした。

## ○ 気仙沼市唐桑地区でのボランティア活動の紹介

A校出身の映画監督花堂純次さんは、大震災発生後、気仙沼市唐桑地区にボランティアのリーダーとして活動していた。母校の児童に被災地の映像をもとに地元の復旧・復興に向けての活動について講演していただいた。また、東日本大震災発生一年後、被災し犠牲になった方々の冥福をお祈りし、復興への灯りを灯す意味で「ワックスボール」作りに取り組んだ。

(図 26～図 27 参照)

また、花堂純次監督の講演を受け、家庭教育学級の会員は、「がんばれ東北竿燈かかし」と題したかかしを被災地の方々への支援のメッセージとして作製した。都城市山田町で開催された「かかしフェスティバル」に出品し、県一位を受賞し九州の地での「がんばれ東北」への意識啓発を図る一助となった。(図 28)

## キ 事例等をとおした考察

本事例は、発生直後に取り組んだものであり十分とは言えない。一連の取り組みを通して考えたことは以下のとおりである。

学校としてできること（自助）、地域の知恵や専門的な知識（共助）との連携を図って一歩一歩着実に積み上げ、行政の支援（公助）により体制を整えていくことが防災・減災対策の礎を築いていくと考える。自助、協助、公助について考えることにする。

## ○ 学校において取り組むべきこと（自助）

学校として防災・減災を考える時、総合的な対応の構想をもち、取り組まなければならない。それには、まず学校が自力で取り組めることを日頃から地道に取り組むことである。

しかし、学校は全てを自力ではできないことを踏まえ、学校だけでの取り組みには限界があることを認識しなければならない。以下、取り組むべき事項を挙げることにする。

- ・学校の実態に即したマニュアルを作成し、職員の防災・減災への意識を高めること。
- ・防災教育の充実とともに避難訓練をとおして、「地震津波における避難の仕方」を身に付け、児童の避難の仕方・職員の役割分担を明確にすること。
- ・地震・津波の情報を迅速に把握し家庭への連絡を的確にするための手立てを講ずること。
- ・日頃より校内安全点検を実施、校内施設・設備の安全性を確かめ、避難路の確保に努めること。

## ○ 地域との連携により取り組むべきこと（共助）

自然災害は、学校だけの問題でなく、地域・社会での問題でもある。日頃より家庭・地域との連携を図り、保護者の理解・協力を得るとともに、地域の知恵をいただき、より効果的に対応していく必要がある。考えられる事項を以下に挙げることにする。

- ・日頃より参観日、安全マップづくり、日常の教育活動の協力者として地域の協力を得ること等、意識して地域との連携を図ること。
- ・学校として地域行事に積極的に参加する等、お互いに顔見知りになること。
- ・地域や保育園等との連携を図り、地域の避難所としてのあり方を考えること。
- ・地区の避難所として学校にどの地区の住民(何人程度)が避難するのかを明確にしておくこと。校区内の地区別人口を把握し、適切に各避難場所への割り振りを行い、住民に周知す

ること。

- ・地区住民を対象とした防災・減災についての研修を実施する必要があること。特に、災害時に守るべきモラル等を徹底すること。

#### ○ 行政関係機関との連携でできること（公助）

大地震津波の発生は、学校や地域の協力だけでは、対応できるものではない。自然災害は、地域住民全体の問題であり、地域全体の動態を冷静に分析し、適切に対応できるよう自治体の主体性と行き届いた地方自治行政の総合的な危機管理体制を整えなければならない。以下、考えられる事項を挙げることにする。

- ・避難場所として備蓄品の確保、施設整備、防災用品の整備等を図る必要がある。  
学校のできる限界を超えており教育委員会を窓口にして市当局と十分に調整すること。
- ・3階建ての校舎屋上は、避難場所として時間帯を問わず地域住民が活用できるように改善すること。
- ・非常災害時に必要な備品、備えなければならない施設、設備等について市当局と連携をし、関係部局が確実なプランを作成するとともに予算を確保すること。

### III まとめ

2015年12月6日付宮崎日日新聞には、『12月4日、国連総会第2委員会で11月5日が「世界津波の日」に制定された。日本主導の決議案を満場一致で採択されたものである。東日本大震災から来年3月で5年となるのを前に、津波の脅威と対策への国際的な意識を高めることがねらいである。11月5日は、日本では江戸時代の安政南海地震(1854年)で紀伊半島などが大津波に襲われた旧暦11月5日を「津波防災の日」と定めている。10月13日に「国際防災の日」が制定されているが、今回は津波に特化した国際デーの制定である。』と掲載されている。世界各地での災害を鑑み、防災に対する意識が世界的に高まっている。2011年10月宮崎大学工学部土木環境工学科 教授 原田隆典氏によれば、「宮崎県での地震津波対策で覚えておくこと」と題し、「1：日本は地震国で、どこでも大地震が起きること。2：立ってられないような強い揺れは、震度6か震度7であること。3：震度6以上の揺れでは、ライフラインはストップし、電話、携帯は輻湊し通じない。このような状況に耐えられるよう日頃から備えること。4：震度6以上の揺れを感じた沿岸部の人は、10分以内に標高6メートル以上の場所に避難すること。5：天と地を知り、今と昔の災害を学び、災害に備えること。6：地域を知り、地域の人を助けること。7：常に災害を意識し、災害を忘れなければ、災害はやってこないと心にとどめよ。(抜粋)」について述べている。また、東日本大震災後、報道等で得た教訓、『先人の知恵「てんでこ」で避難する。「避難した家の入り口に避難済みの札を下げる。」「大地震等が発生した場合は、踏切の遮断機は自動制御される。」「学校より標高の低い自宅へは帰さない。』等数え切れない。宮崎大学 村上啓介氏は講演「学校の防災について」で、「学校防災で重要となるポイント」として6点挙げている。「1：防災計画、初動体制、行動マニュアルの整備 2：安全な避難場所と避難経路の確保 3：情報の伝達・共有体制の整備と運用 4：防災教育の充実と実践 5：施設の強度確認と補強 6：地域との連携」である。原田氏・村上氏の提言を踏まえ、先人の知恵を借り、地域と連携を図ることで子どもと教職員の生命を守るため南海トラフ巨大地震津波等を想定し日常から学校の防災・減災への備えを蓄えていくことが大切であると考えます。

### IV おわりに

現在、社会の様相が大きく変容し、何が起きるか予測できぬ不透明な現況である。近年、発



生した事件・事故を振り返ると、学校には多岐にわたる危機管理対応が必要であると強く考える。幼児・児童・生徒・学生の命を預かり教育活動を営んでいる学校にとって、安全で安心して通える学校にするためには、幼児・児童・生徒・学生のサインを見抜き、教職員の動態をとらえ、施設・設備の実態を把握する等、教職員一人一人が危機管理意識を持ち、柔軟に迅速に対応できる危機管理体制を充実していかなければならない。

しかし、学校における危機管理は、学校だけで対応できるものではない。自助・協助・公助の考え方のもと、各々の役割を果たし互いに連携して、危機管理対応していくことが大切であるとする。しっかり全体構想とバランス感覚をもったリーダーのもと教職員全員が共通理解し、組織として事象に的確に対応していくことが大切であるとする。

本研究を通して、学校における危機管理の大切さ、必要性について身近な生活の場、学校での取り組みの在り方を見直す機会を与えていただいたことに深甚の感謝の意を表したい。

参照資料

図 1

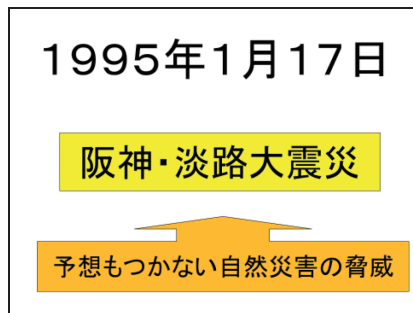


図 2



図 3



図 4

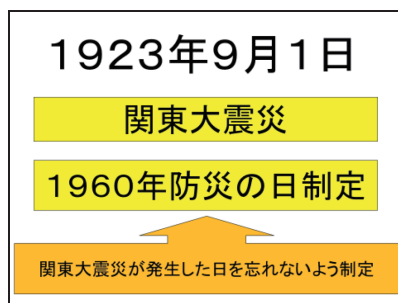


図 5

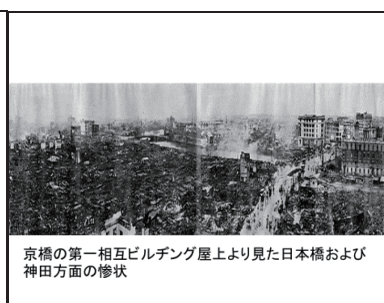


図 6

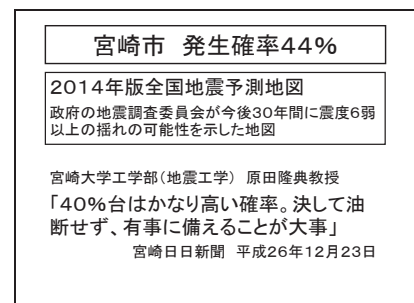


図 7

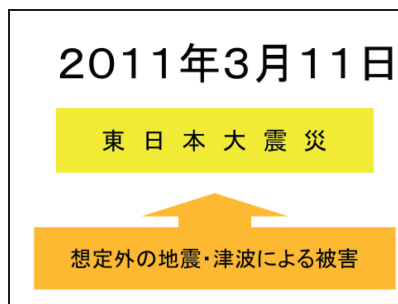


図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



表 1

防災計画（児童在校時に地震が発生し 5 メートル程度の津波が 20 分以内に来ることが予想される場合）

	第一次対応	第二次対応	第三次対応
津波が 20 分以内に到達すると予想される場合	地震発生に伴い、児童の避難の予告をする。 ① 教頭による放送での指示 ② 教室内での地震対応 ③ 放送指示で 3 階へ退避 負傷者等がいる場合 事務主幹が救急連絡 119 負傷者は養護教諭対応	校舎内退避、校舎 3 階への誘導 ① 北校舎 特支、3 年、5 年 ・ 5 年・・・自学級 責任者：教頭 ・ 特支、3 年・・・廊下 ② 中校舎 1, 2, 4, 6 年 ・ 6 年・・・自学級 責任者：校長 ・ 1, 2, 4 年 廊 下 ③ 南校舎 地域開放・教務主任 ④ 家庭への校舎内待機連絡	児童の安全確認、校舎内安全確認 確認事項 ① 児童・職員の安全・健康確認 ② 通電の確認 ③ 水道の破損状況確認 ④ 室内備品等の散乱状況確認 ⑤ トイレ使用確認 * 防災情報の適時把握と的確な判断

## 留意事項

- 家族ばらばらに避難することが考えられるので、日常から津波が沈静化した時の家族の集合場所等を決めておくこと。
- 非常時には、職員は、児童の安全管理に努める。
- 保護者への連絡、問い合わせについては、電話回線が使用できないことも考えられるので、携帯電話等により連絡を取り合う。停電でも使用可能な充電器の準備もする。トランシーバーの使用も視野に入れる。
- 停電が予想されるので、懐中電灯を常備しておく。もしくはカンテラなどの照明器具を準備する必要がある。
- 食料、飲料水、毛布、トイレットペーパーの備蓄。  
トイレの使用についても考える。（水道管が破壊されている可能性がある。）

表 2

内容及び活動	指導上の留意点
1 地震・津波について学習する。 ○ 地震に対する対処の仕方 ・ 頭を守り、腰を下ろし、待つ ・ 机の下に入ることができる場合は頭から入る ・ 津波に対する対処の仕方 ・ 高い所に移動する 北校舎： なかよし・かがやき 3 年、5 年 中校舎： 1 年、2 年、4 年、6 年 南校舎： 地域住民	○ 地震にともなって、津波が 20 分以内に到達するという場合の避難訓練であることを説明する。 ○ 地震への対処の仕方を確認する。 ○ 津波が 20 分以内に到達することを想定して、中校舎の 3 階に避難することを確認する。 ・ 放送や先生の指示をよく聞く。 ○ 担当による人員点呼→学年主任に報告 →中校舎：校長に報告北校舎：教頭に報告→校長に報告 南校舎 教務主任が誘導
2 学校で災害が起こった場合の安全な避難の仕方を知る。「あ」「お」「は」「し」「も」 ☆ 階段、曲がり角、出入り口では特に注意しもし前の人が転んだときは手を挙げて直ちに停止し後に知らせる。 ☆ 病弱、歩行困難児の世話役などを各学年で決めておく。	○ 避難時の行動について全児童に徹底する。 ・ 避難経路を確認する。 ・ 窓を開ける。 ・ 戸口を開ける。 ・ 上履きで避難する。 ・ 決して戻らない。
3 その他の時間・場所での避難の仕方についても指導しておく。 ○ 休み時間・掃除時間 ○ 特別教室・体育館 ○ 廊下・階段・靴箱 ○ トイレ ○ 中庭・運動場	○ 近くの先生の指示をよく聞く。 ○ 近くに先生がいない場合は、自分たちで静かに避難すること。避難経路、場所の指示をしておく。 ○ 放送をしっかり聞くこと。 ○ 「あ・お・は・し・も」を守ること。 ○ 教室に行ったり、戻ったりしないこと。 ○ 避難後は学年の場所に並び静かにしておくこと。

図 1 2



① 中校舎 3 階に避難する 2 年生

図 1 3



② 避難した児童

図 1 4



③ 廊下へ避難し人員点検

図 1 5



④ 避難後指導を受ける児童

図 1 6



⑤ 校内放送で地震・津波について話を聞く児童

表 3

宮崎市立 A 小学校 安全対策マニュアルチェック表

○完了    △作業中    ×今後の予定

時期	対応の流れ	安全対策マニュアル	チェック項目	確認
事前	災害に備える。	○「東日本大震災」等を教訓にして、従来の安全対策マニュアルを見直す。 ○新安全対策マニュアルを基準に、様々な災害への備えを整える。 ※大規模地震に備えた安全点検の実施（落下物・倒れやすい備品等の処理を含む。） ※防災グッズ（ラジオ、非常用照明、飲料水、トランシーバー等）の購入や点検 ○「東日本大震災」等を教訓にして、これまでの「防災教育」を見直す。  ○地域の防災訓練で、地域住民の避難スペース（南校舎屋上と 2 階フロア）への見学を実施した。	「安全対策マニュアル」、「防災教育指導計画」、避難訓練計画等の見直し	△
			「防災情報メール」の受信登録	△
			「緊急メール配信サービス」の開始と普及	△
			「児童用 ID カード」の作成と保管	△
			避難場所として必要な備品等の購入	△
			大規模地震に備えた安全点検の実施	△
			校区内にある高い建築物のチェック	△
			地域が主催する防災訓練への施設開放	○

表 4

大規模地震に備えた安全点検表

場 所	状 態	対処済	要対処
1 の 1 教室	児童像額・キャビネット→落下・転倒の恐れあり		
1 の 2 教室	大型テレビ→転倒の恐れあり 壁掛け時計→落下の恐れあり		
1 の 3 教室	児童像額・校時程の額・時計→落下の恐れあり		
1 の 4 教室	OHP のスクリーン→落下しないか？		
1 の 5 教室	大型テレビ・キーボード→転倒の恐れあり		
2 の 1 教室	ビデオデッキ・児童像額・実物投影機・時計→落下の恐れあり		



図 1 7



① 南校舎 2 階に避難体験

図 2 0

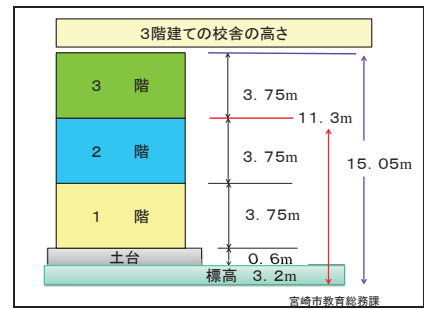
図 1 8



②校舎の高さを説明する

図 2 1

図 1 9



③ 屋上避難体験海岸・河口の距離を知る

図 2 2



④屋上から学校の近郊を展望

図 2 3

図 2 4



①ハザードマップ上での発見と確認

図 2 5



②児童・保護者・自治会・消防局と共に学ぶ



③わかったことを発表する



④地震・津波について話を聞く

図 2 6

図 2 7



②気仙沼市唐桑地区の犠牲者へのメッセージ

図 2 8



③がんばれ東北竿燈かかし県 1 位



①花堂監督に復興の実際を聞く

【 参考文献 】

- 埼玉県立南教育センター政策研究部(1998)「学校における的確な危機管理の在り方に関する研究  
田中庸恵(2004)「学校や地域の実態を踏まえたマニュアルの作成をどう進めるか」教職員研修  
フリー百科事典「ウィキペディア」(2014) 東日本大震災  
宮崎市津波ハザードマップ(2013)  
宮崎弘尚(2002)「学校における危機管理」安全で安心して通える学校づくりをめざして  
宮崎弘尚(2015) 宮崎学園短期大学「教育研究」第 11 号 PP83-86「日常の授業の充実をめざして」  
山形県教育委員会(2010)「学校における危機管理の手引き 総論」

【 引用文献 】

- 菱村幸彦(2000)「危機管理の法律常識」 教育開発研究所  
フリー百科事典「ウィキペディア」(2014) 関東大震災  
フリー百科事典「ウィキペディア」(2014) 阪神・淡路大震災  
宮城県山元町立中浜小学校(2011)「震災を乗り越えて」  
<https://www.nier.go.jp/06-jigyuu/kyouiku-sinpo.h23/8-siryou.pdf>  
宮崎弘尚(2002)「学校における危機管理」安全で安心して通える学校づくりをめざして  
宮崎弘尚(2011)「備えあれば憂いなし～教訓を生かして」九州教育学会研究紀要第 39 号  
PP25-31 九州教育学会  
宮崎弘尚(2015)「日常の授業の充実をめざして」宮崎学園短期大学「教育研究」第 11 号 PP83-86.  
文部科学省(2005)「学校における防犯教室等実践事例集」  
文部科学省(2008) 中央教育審議会答申  
山形県教育委員会(2010)「学校における危機管理の手引き 総論」